令和7年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

倭国と古代東アジア 交流と諸国興亡の時代

第2回　令和7年9月20日（土）

「倭軍は百済・加耶連合軍とともに高句麗・新羅両軍といかに戦ったか －戦闘の実相を探る－」

（一社）日本考古学協会員　岡安 光彦 氏

福岡市埋蔵文化財センター ホームページ

【福岡市の文化財】Facebook

福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881 福岡市博多区井相田2-1-94　TEL：092-571-2921　FAX：092-571-2825

電子メール：maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp

上半の遺物写真は、公共ヌリ第1タイプで公開された大韓民国e뮤지엄 http://www.emuseum.go.kr/mainから取得した画像を加工し配置した。所蔵品番号は左から신수156（慶州市出土黄金飾剛心葉型耳飾）、신수1289（慶州市出土金製指輪）、전주56093（高昌郡出土圓筒形土器）、나주7487（ペノリ3号墳出土青）、나주7488（ペノリ3号墳出土鐙）、무령23（ムリョン王陵出土獸帯鏡）。下半の遺物写真はColBase（https://colbase.nich.go.jp/）と、世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群デジタル・アーカイブhttps://www.munakata-archives.asia/frmDefault.aspxから取得した画像、福岡市埋蔵文化財センター所蔵画像を加工し配置した。右上から江田船山古墳出土獸帯鏡、沖ノ島出土金製指輪、江田船山古墳出土衝角付冑、老司古墳出土甲冑、江田船山古墳出土金製耳飾、今宿大塚出土円筒埴輪。青銅中央は韓国光州市明花洞古墳。

倭軍は百済・加耶連合軍とともに高句麗・新羅両軍といかに戦ったか

–戦闘の実相を探る–

岡 安 光 彦（日本考古学協会会員）

西晋の滅亡（316年）前後の混乱が東アジアの地政学[1]的枠組みを軋ませると、軍事大国高句麗が周辺への侵略を開始した。313年には楽浪郡、翌年には帯方郡を攻略し、さらに南方へ触手を伸ばした。これに対して百済・加耶は戦いによる独立を、新羅は服属して生き延びる道を選んだ。こうした情勢の中で、鉄資源などをめぐって半島南部との結びつきが強かった倭は、百済と加耶を支援して戦列に加わった。

この三百年以上続いた多国間戦争で、倭はどのように戦ったのだろうか。これに対して、倭軍は白兵戦を好み、重装甲の歩兵を指向したとする考えがある（松木　2001）。しかし倭軍の主力は機動性に富んだ軽装弓歩兵で、間接戦闘に秀でていた。また、軽装甲で馬を持たない倭兵は、重装騎兵を主力とする高句麗兵の敵ではなかったとする見解もある（金泰植　2019）。しかし軽装弓兵が重装騎兵の鬼門となりうることは、軍事史の一般常識である（Rogers　2018）。従来の研究には、軍事を対象としながら、軍事学や軍事史学を軽んじたことによる同様の誤りが多い。

そこで今回は、軍事学や軍事史学の成果も参照しながら、倭軍は白村江の戦い（663年）で唐の海軍艦隊に敗れる瞬間まで、一貫して水上戦力を最大の強みとする軍隊であったこと、百済・加耶と力を補い合いながら高句麗・新羅と戦う過程で、軽装弓兵を主力とする特異な軍事編成を生み出し、それを後の律令軍制まで引き継いだこと、その過程で上長下短の特異なフォルムを持つ倭弓が全軍に採用され倭の五王の時代（古墳時代中期）までに広く普及したこと、などについて話しを進めてみたいと思う。

はじめに

倭人のルーツ

古代の日本語、倭語を話す人々は、日本列島にやってくる前、朝鮮半島に住み、無文土器文化を担っていた。さらにそれ以前、半島に移ってくる前は、西遼河（現在の中国の内モンゴル自治区から遼寧省へ流れる川）周辺で雑穀農業を営むアルタイ語系の言葉を話す農民だったとも、別の説によれば、黄海や東シナ海沿岸に住んで水田農耕を営みながら交易や手工業生産も手がける、濊語（倭語と同系の言語）を話す海洋民だったともいわれている（濊倭同系説）。現在のところ、まだ学説は定まっていない（文末に参考資料）。

紀元前9世紀頃に気候が寒冷化すると、倭語を話していた朝鮮半島の無文土器文化人の一部が、温かい土地を求めて北九州に移住し、水田稲作農耕を開始し、先住民の縄文人と混血しながら弥生文化を生み出していった（その過程で縄文語は倭語に吸収された）。いっぽう、朝鮮半島には、西遼河付近から今度はアルタイ語系の古代朝鮮語（韓語）を話す農耕民が移住してきて、倭語を話す先住民とモザイク状に混住するようになった。つまり、古代の朝鮮半島は、一時期、倭語や韓語などの諸語が入り混じって話される多言語社会だったのである。百済は不思議な言語構成の国で、庶民は新羅語と同じ古代朝鮮語系の百済語を、支配階級は別の言語系統の百済王族語を話していたという。しかし7世紀に新羅が朝鮮半島を統一した結果、新羅の言語である韓語が他の言語を置き換えて今日の朝鮮語が成立した。つまりそれ以前は、朝鮮半島にも倭語を話す人々、倭人が暮らしていたわけである。

[1] 地理的な条件が国家の外交や軍事戦略、経済、社会に与える影響を分析する学。

倭弓のルーツ

倭の兵士にとって最も重要な武器は弓だった。人の背丈を超える長さの大型の弓だが、弣（弓を握る持ち手の部分）が弓幹の下側に位置する上下非対称の作りで、それが目立った特徴である。遠くからでも一目で倭人の弓と分かったにちがいない。ユニークさが注目されたのか、『魏志倭人伝』にも倭人の弓は「短下長上」の木弓だと特記されている。つまり、古墳時代前夜の卑弥呼の時代、中原（黄河中・下流域の平原）の漢人社会の知識層にも、「倭人は上長下短の弓を使う」と知られていたわけである。本論では、この独特なフォルムの長弓を、倭人の弓の意で「倭弓」と呼ぶことにする。ちなみに、現在の和弓は、竹と木の薄い板を鹿革などから抽出した膠で張り合わせた木質積層弓である。これに対して倭弓は単一の木材を削った木弓（丸木弓）である。倭弓に改良が重ねられて、平安時代後半に概ね現在の和弓の姿になった。

倭弓のルーツは、太平洋やインド洋の沿岸・島嶼部の海洋性樹林帯に主に分布する南方系の大型木製弓とみられる。その最古の例は、中国の東シナ海沿岸、杭州湾を臨む浙江省の跨湖橋遺跡から出土した、新石器時代（紀元前5000～6000年頃）の漆塗りの丸木弓である。弓の両端が欠損して残存長は121cmだが、一般的な弓のプロポーションから復元すると、180cm前後の大型の弓であったと推定できる。跨湖橋遺跡は稲作開始期の水辺の集落で、家畜化初期段階のブタの骨や丸木舟なども報告されている（浙江省文物考古研究所　2004）。この跨湖橋出土例を先駆けとして、漆などの樹脂を塗り、藤蔓を巻いて補強した大型の弓が、太平洋の沿岸・島嶼へと普及していく。巨視的に見ると、倭弓も環太平洋タイプの大型弓で、東シナ海の海洋民を介して倭人に伝わったと考えられる（岡安 2015）。

極東でこの種の大型弓、倭弓（あるいはそのプロトタイプ）が最初に出現するのは、朝鮮半島の南端エリアで、原三国時代の加耶で２例知られている。日本列島では少し遅れ、弥生時代中期頃までに登場する。倭語は半島と列島のいずれでも話されており、また加耶は倭ととりわけ関係の深い地域であり、倭系の文物も多量に出土している（逆に北九州からは加耶系の文物が大量に出土する）から、初期の倭弓が加耶から出土しても全く不思議はない。（詳しくは文末資料を参照されたい）

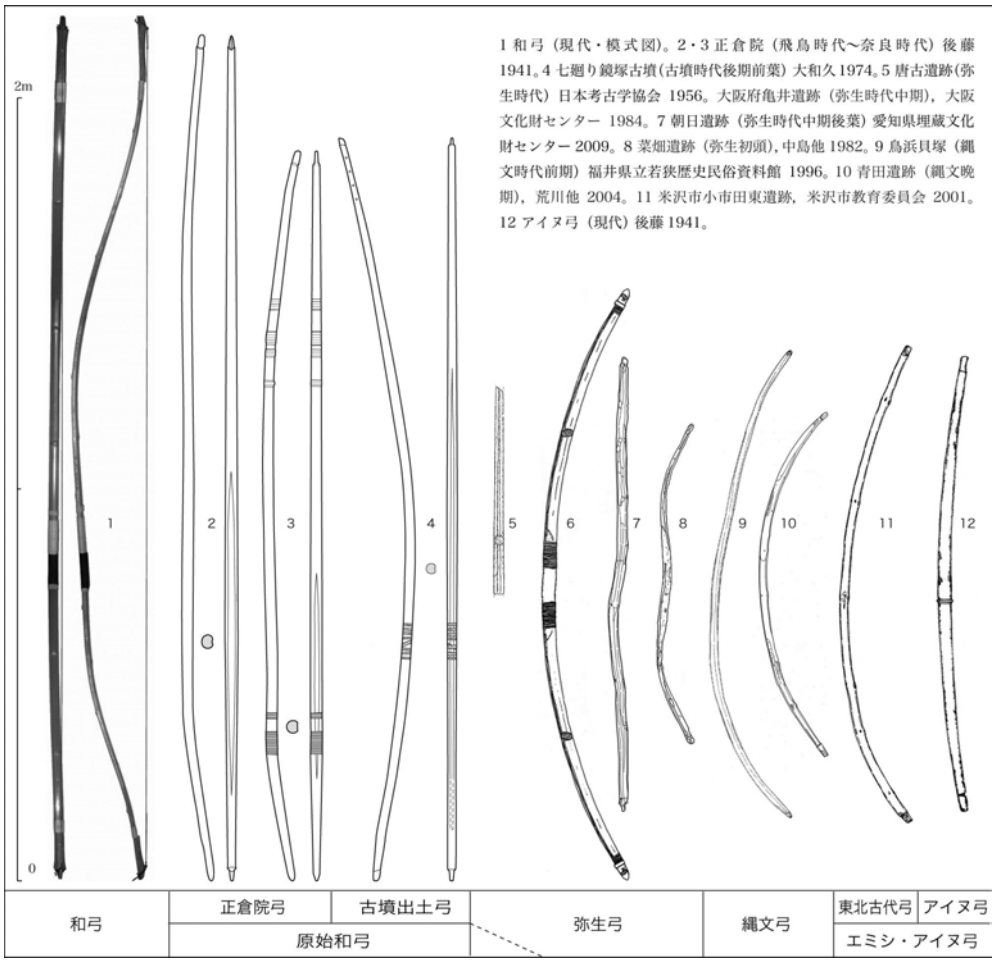


図１ 縄文・弥生弓から倭弓（原始和弓）へ、そして和弓への変遷（岡安2015）

倭軍の水上戦力と船の大きさ

倭軍の水・陸の戦力の具体的編成を知ることができる史料は乏しい。しかし、多少の手がかりはある。例えば『日本書紀』欽明天皇十五（554）年条に、百済の要請に応じて兵士1000名、馬100匹、船40隻を派遣したという記述がある。旧陸軍の数量表を参考に馬の輸送に必要な面積を兵士10名分相当と見積もって計算すると、40隻のうちの20隻に兵士が50名ずつ、残り半数の20隻に馬を10頭ずつ搭載すれば、兵士1000名と馬100匹とを船舶40隻で輸送できる勘定になる。

さらに、時代は律令期まで降るが、『続日本書紀』天平宝字五（761）年条に記された「新羅征討軍計画」が参考になる。それによると、例えば東海道の12カ国から動員する軍勢は、船舶152隻、兵士15700人、郡司子弟78人、水手7520人をもって編成する計画だったことがわかる。全軍とも船１隻当たり兵士103名、水手（漕ぎ手）50名（南海道や西海道は40名）が基本単位となっている。

これを律令軍制に照らすと、船１隻に２隊100名とそれを率いる隊正（50人の長）2名と旅帥（100人の長）１名の合わせて103名の兵士と下士官が乗船、さらに２隻に１人ほど軍毅（500～1000名で編成された軍団を統率した武官/現代でいえば少佐クラスの指揮官/郡司子弟＝地方有力層の子弟）が乗り組んだことになり、両者の間に整合性がある。南海道と西海道の１隻当たりの水手のが数が少ないのは、東日本より西日本側に熟練した船員が多かったことを反映しているかもしれない。

以上をもとにすれば、６世紀～８世紀までの200年の間に、船１隻に搭乗できる水手以外の兵数は50名から100名へと倍増したことになる。

ところが現在の「考古学の通説」に基づくと、漕ぎ手以外に50名とか100名といった多数の兵士を乗せることができる大型船はありえないのである。出土した船舶の断片や、船舶を模った埴輪などから復元されたいわゆる準構造船（船底部に丸木材を組

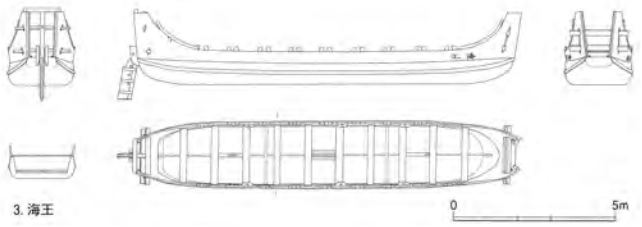


図３ 復元された半構造船「海王」

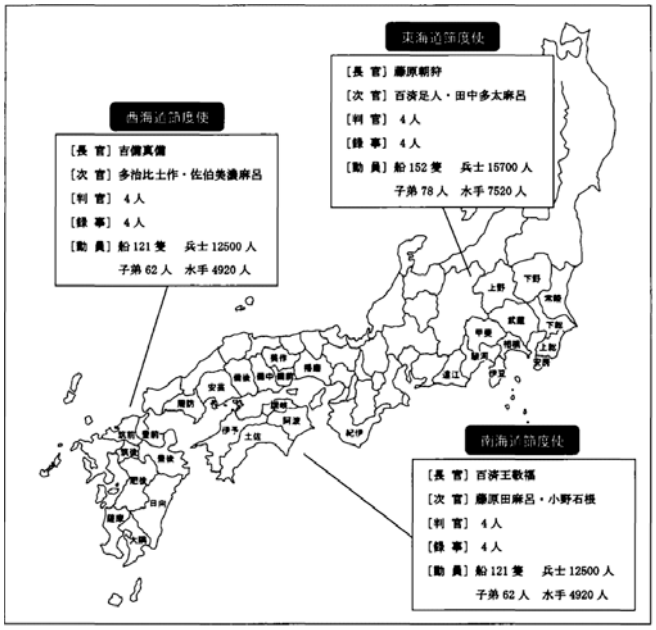


図２　天平宝字五（761）年の新羅征討計画（五十嵐 2014）

み込んだ、丸木舟と構造船の中間的形態の舟、図２）が古墳時代頃までの大型船舶と推定されているが、その程度の規模だと、20～30人程度の水手を乗せるのが精一杯で、それ以外の多数の兵士を、まして馬を輸送するゆとりなどない。つまり「考古学の通説」に従っていると、これ以上の議論が進まなくなってしまうのである。

そこで今回は、「人間活動のすべての痕跡がすべて残るわけではない」という観点（高倉　2013）に立って、古墳時代には漕ぎ手30名程度の他に50人程度の兵士を、さらに古代になると漕ぎ手50名程度の他に100名程度を搭載できる大型の構造船が存在したであろうという仮定のもとに、以下のスペキュレーション（speculation：不確かな情報に基づく推論）を進める。

対高句麗・新羅戦争のはじまり

戦いの前史

1145年に編纂された『三国史記』中の『新羅本記』は、西暦14年に倭人が兵船100隻余を繰り出して海辺に侵入し民家を掠奪したので、精兵を動員してこれを防いだとする記事をかわきりに、500年間に35回もの倭人との交戦があったことを記している。いっぽう、193年には倭が大飢饉となり食を求めて1000人余がやって来た、また312年には倭王が婚姻を求めて使節をよこしたなどの通交記録も12個所ある。個々の記事の信憑性はともかく、紀元前後から、倭人が頻繁に渡海し、多くの場合海賊行為を

働いていた可能性が高いことがわかる。ほぼ一貫して友好関係にあった加耶諸国とは大きな違いである。新羅と倭のこうした因縁の敵対関係は、高句麗南侵以降の戦況にも影響を与える。

４世紀後葉（西暦369-371年）の戦闘

戦いの背景

４世紀後半、高句麗による侵略の脅威に晒された百済は、積極外交を展開し、倭との同盟関係を模索した。364年、百済の肖古王（近肖古王）は、使節団を介して倭に五色絲絹・角弓箭[2]・鐵鋌四〇枚などを贈ってくる。さらに369年には、天理市石上神宮に現存する七支刀が贈られたとみられる。こうした外交活動を介して、両国間には、何らかの軍事的同盟関係が成立していた可能性が高い。

戦況（『三国史記』百済本記による）

369年、高句麗の故国原王が兵を発し、歩騎2万を率いて雉壤（現在の黄海道白川）に駐屯し、兵を分けて民家を侵奪した。これに対して、百済の近肖古王は太子近仇首を派遣し、高句麗軍を急襲して五千を捕虜にしたという。

371年、高句麗が再び百済に侵攻した。百済の近肖古王は浿河（現在の礼成江）の川辺に伏兵を置いてこれを急襲して撃破。さらに兵３万で高句麗を追撃して平壌を攻撃した。高句麗王は奮戦したが、流れ矢に当たって戦死したとされる。

考察

戦場となった雉壤（白川）は、浿河支流の漢橋川右岸北側の山裾に位置する。平壌から出撃した高句麗軍は、馬では通過しにくい平野部低湿地を避け、山麓沿いをぐるりと反時計回りに回って、白川の西方から侵攻してきた可能性が高い。浿河沿いに南下する近道も考えられるが、騎馬で通行することが難しい谷間の隘路が多く、繰り返し渡河が必要な地点も多いので、あまり現実的ではない。なお、この時に侵攻してきた高句麗軍2万、それを撃破して

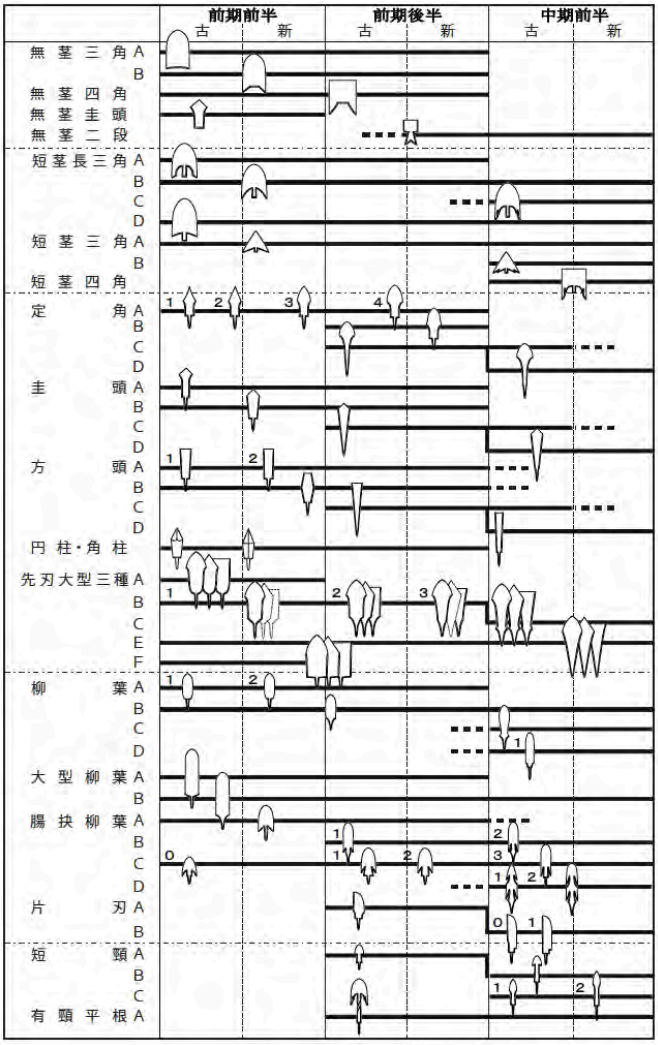


図４　激しい戦いを反映してか、古墳時代前期から中期にかけての極東地域の鉄族は急速な発達を遂げていく（川畑 2015）

追撃した百済軍３万という数字には、いずれも誇張があるように思われる。

白川周辺（図３）は、一目で分かるように、騎兵を主力とする高句麗軍にとっては、行動しにくい複雑な地形が広がっている。山地も、現在では水田となっている低湿地も、馬は自由に移動できない。当然、こうした地形では、ユーラシア乾燥地帯の草原のように、大規模な騎兵集団を効果的に展開するのに十分な空間も確保できない。しかも、先の漢橋川は下流部で100メートル以上、主流の浿河に至っては１キロメートル前後の川幅があり、船舶を利用しないことには部隊は渡河できない。渡河して

[2] 角弓箭とは弓腹に圧縮に強い水牛の角、弓背に伸縮に強い動物の腱を配し（中間に木質を挟む場合もある）、両者を動物質の強力な膠で張り合わせた彎曲複合弓（彎弓/composite bow）のことである。弓の両翼には、動物骨など硬い素材で作ったシヤ（siyah）と呼ばれるシャフト状の部品を装着し、シヤと弓幹との接合部を支点として梃子の原理が働き、強い弓を平均した力で引けるようにした仕掛けが施されている（おそらく遊牧騎馬民族の匈奴が発明した）。百済がこの弓を倭に贈ったという記事から（それが事実であればだが）、百済は彎弓を使用していたことが分かる。高句麗を含め、極東諸民族は、三翼鏃を主体とする多くの遊牧騎馬民族と異なり、類似した長頸鏃を使っているから、鏃の特徴だけでは、木製の長弓を使っているのか、動物質の彎弓を使っているのかは判断できないということになる。

図５　高句麗が侵入した礼成江河口、白川周辺（５万分の１「白川」、大正八年 朝鮮総督府）

も、対岸には同様の、あるいはより狭隘（きょうあい）な地形が行手を阻んでいる。うまく渡河できたとしても、高句麗の騎兵集団は、対岸の泥田の中で身動きできない状態に陥り、周辺の微高地に展開した百済兵に包囲されかねない。369年と372年の両戦闘においては、いずれもこの付近において高句麗軍が捕捉され、多数が捕虜になって撃退されている。それには明確な地勢上の理由があるといえる。百済軍は当初からこの付近を枢要（すうよう）な戦術要地（自軍の有利な戦いを展開するために確保すべき戦術的重要性を持つ地点）として認識し、伏撃（ふくげき）（Ambush/敵を待ち伏せして奇襲する戦闘行動）を周到に準備していたに違いない。

なお、この戦域の南方10kmには、漢江河口を挟んで、先の朝鮮戦争でマッカーサー率いる国連軍がソウルを奪還し共産軍の補給路を断つべく上陸作戦を敢行した仁川（インチョン）が位置している。さらに、東方へ20kmの地点には、今でも北朝鮮軍と国連軍とが睨み合う板門店（はんもんてん）（軍事停戦委員会 板門店（パンムンジョム）共同警備区域）が位置する。朝鮮半島を二分して敵対する軍事勢力が真っ向から衝突した場合には、この漢江河口付近が、繰り返し重要な戦略的・戦術的要地になってきたことが分かる。百済軍が正確にどの地点で高句麗軍を待ち伏せたかは不明でだが、地形から見て、浿河の渡河地点で退路を断てば一網打尽にできることは明らかだである

さて、浿河（ぱいすい）の戦闘には、倭軍も加わっていた可能性が高い。松木武彦氏は「倭の戦団を後（ご）づめ（予備軍）として利用できたからこそ、敵の敗走を追って

その都まで攻め込むという積極策に踏み込めたのだと思う」としている（松木　2001）。しかし、倭軍の強みが水軍であることを踏まえるならば「百済軍の後づめ」などという大人しい存在に止まっていたとはとても思えない。

浿河の河口周辺は、水軍が極めて重要な役割を果たす戦域であったことは、地勢から見て一目瞭然である。倭軍の船舶は、多数の水手が櫂を漕いで推進する一種のガレー船で、指揮官の号令に従って櫂を操り、前進や後退、旋回などが自在にできる機動性に富んだ軍船だった。また竜骨(船首から船尾へ船底を貫く船の背骨にあたる部材)を持つ船と違って吃水(船体が沈む深さ)も浅いから、河川の上流部まで乗り入れることができた。低湿地で難渋している高句麗軍を海側から攻撃する部隊としては、まさに打って付けといえたと推測できる。

倭の水軍は、漢江ないしその河口周辺のどこかに集結して戦機をうかがっていたと思われるが、交代で出撃して、周辺一帯の海域や流入河川を哨戒していたはずである。またその際、高句麗軍との不時接敵に備え、倭軍のもう一つの強み、軽装弓兵部隊を随伴していたことは間違いあるまい。だとすれば、彼らを上陸させての偵察・哨戒も可能であった。さらに、百済軍歩兵部隊を船舶に便乗させて敵の背後に輸送し、高句麗軍を奇襲させることもできた。さまざまな戦術を通して、水軍の持ち味が十分に発揮されたに違いない。また、百済軍と高句麗軍との主力同士の戦闘では、倭軍弓兵による背後あるいは側面からの支援射撃が、百済鉾歩兵の前進を大いに助けたに違いない。

なお、浿河の戦いに勝利して、平壌への追撃戦が開始された際、倭の水軍が黄海をぐるっと周って大同江に入り、遡行して平壌攻撃に参加したという戦況も考えられる。航程およそ200キロ程度の距離になり、補給と漕ぎ手の体力を考えると、敗走する高句麗軍の先回りをして待ち伏せといった戦い方を想定するのは難しいかもしれない。

なお、補足資料に紹介した濊倭同系説が成立するとなると、話は大きく変わってくる。倭人と倭語を共有したとされる濊人の分布は、モザイク状に朝鮮半島全域、楽浪や帯方の地にもに及んでいたとされる。彼らは「水民」として外洋と内水の交易に従事し、漢語を理解する者も多く、時期を遡ると、楽浪郡などで官吏に就く物もあったとされる。その海洋民としての性格が、倭人に引き継がれている、あるいは共有されていると考えると、新羅による半島統一以前には、倭語を話し繋がりの強い濊人が、戦域周辺でも広く社会的に活動していたことになる。そうなると、倭の水軍の性格は全く別のものとなるだろう。濊倭同系論は、少し考えただけでも、実に興味深い観点を提供してくれるが、止め処なくなってしまうので、そうした観点もあることを指摘するにとどめ今回はこれ以上深入りしないことにする。

5世紀初頭の戦闘

文字資料から見た戦況

広開土王碑文によると（武田　2007）、西暦400年、前年に新羅が倭に占領されたと救援を求めてきたのに応えて、高句麗は歩騎五万の大軍を新羅方面に派兵した。倭軍は、男居城（位置不明）から新羅城（今の慶州）まで、あたり一体に満ちみちていたが、高句麗軍が接近すると、一斉に退却した。さらに任那加羅の従拔城（現在の金海）に高句麗軍が至ると、城兵はたちまち帰伏したという。

『新羅本記』によると、402年、即位したばかりの新羅王寶聖尼師今は、倭と好を通じようと王子を人質として送り融和を図った。しかし倭の攻撃は一向に止まず、405年には新羅の東部海岸の城を攻撃し、407年には二回にわたって同様に東部海岸を襲撃して住民百人を連れ去るなど、繰り返し侵攻して周辺を荒らし回った。408年、たまりかねた寶聖尼師今は、倭軍が軍営を設けて兵器と軍需品を貯え出撃拠点となっている対馬を、精鋭をもって攻略して軍需品を奪う作戦を構想した。しかし、渡海攻撃の危険性を説く臣下に説得されて断念し、倭軍の侵入が予想される経路の要地に関所を設けて攻撃に備える専守防衛の方針に立ち戻ったという。他にも類似の記事が認められ、新羅にとって倭軍の出撃拠点である対馬への軍事侵攻は、実際には果たすことのできない悲願だったことがうかがい知れる。

軍事史学的な考察

朝鮮半島の地勢を大まか俯瞰すると、西側に山地が連なり、東側にそれら山地から流れ出る河川に開析（河川の浸食作用によって地形に谷などが刻まれること）された大小の平地が広がる。そのため、東側の平野に立地する国家は耕地に恵まれて豊かだが、周囲の敵から守りにくい。百済の地政学的苦労

はそこにあった。半島南部の海岸は山がちで小平野が海岸線に断続的に並ぶ。交易には便利だが、大きな政治勢力は育ちにくい。これに対して、山間の盆地に立国した新羅は耕地が乏しく、農業経済は貧困だが、東海岸からの倭の侵入さえ除けば、百済などに比べれてば、はるかに国土を守りやすい。三国時代までの新羅にとって、倭が最大の地政学的脅威であった。

朝鮮半島の南東部に南北に連なる山間地の谷間にその拠点を置く新羅だが、国土の東側は長い海岸線で日本海に開けている。倭軍の策源（作戦軍の活動および生存上の根拠地）である対馬への攻撃が実際には不可能だったことに象徴されるように、この期の新羅の海上戦力は著しく劣勢だった。これは、加耶や倭の人々の成り立ちに海洋民的な性格が強いのに比べ、無文土器文化人に後続して、満州の西遼河付近から朝鮮半島へと移住してきた古代朝鮮語話者の新羅人には、海洋活動とは縁遠い、内陸農耕民的な性格が強かったことによるのかもしれない。いずれにしても、周辺海域は倭の水軍によってほぼ制海（特定の海域を武力で支配し必要とする海上交通路の利用を確保し敵の利用を妨げ得る状態またはその能力）されており、倭の舟艇は新羅の東海岸を好きな時に哨戒（敵の侵入や襲撃に備えて周辺あるいは特定の区域を警戒すること）・偵察できた。また、それによって得られる諸情報をもとにして、倭軍は何時、何処に侵攻するかを、自由に決定することができた。新羅の東海岸戦域における戦いの主導権は、常に倭が握っていたのである。高句麗軍の新羅派兵は、そうした新羅の劣勢を打破することを目的に行われたと考えるのが妥当だろう。

さて、その高句麗軍であるが、安岳３号墳（北朝鮮の南西端に位置する黄海南道の北部、安岳郡安岳面兪雪里に所在する4世紀半ばの古墳で、墓誌から被葬者は高句麗に亡命した前燕の武将冬寿とする説が有力）の壁画から、重装騎兵・軽騎兵・鉾歩兵など多様な兵種から重層的に編成され軍隊であったことが分かる。このように多兵種を統合的に運用できる規模を持った軍隊の編成を、今回は帝国的軍事編成と呼ぶことにする。例えば、秦の始皇帝陵の兵馬俑坑に示される多様な兵種の部隊からなる軍隊編成が、帝国的軍事編成の非常にわかり易い例である。同じ投射兵器を持つ部隊でも、彎弓兵と弩兵の部隊では、髪型も被り物も衣装も異なる。国や地域単位で動員された軍事組織は、それぞれの民族や地

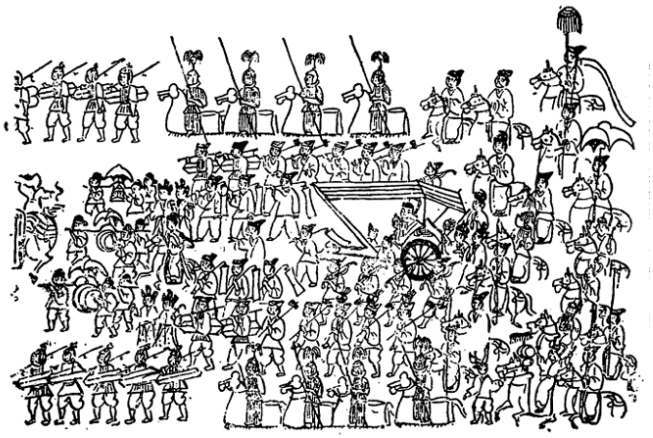


図６　高句麗軍の帝国的な軍事編成（安岳３号墳壁画）

域固有の強みをもつ兵力だった。兵馬俑坑の異なる兵種集団は、動員された国や地域や民族の単位を表しているにちがいない。同様に、エジプト軍は南の属国ヌビア弓兵を自軍の歩兵と統合的に運用した。アレクサンダー大王も、ローマ軍も、騎兵や弓兵など幼少期からの長期訓練が必要な兵種を特定の国や民族に依存し、総合力を有する帝国的軍事編成を行った。高句麗軍もそうした帝国的軍事編成が可能な、強力な軍隊であったに違いない。

そのため、高句麗の大軍とくに重装騎兵を前に、倭軍は呆気なく蹴散らされた、とされることが多いが、果たして本当だろうか。そもそも、歩騎５万という広開土王碑文の数字からして誇張があるだろう。韓国の歴史家、金泰植氏（金　2019）は、この時期の高句麗軍の編成は、歩兵から騎兵主体に転じており、しかも重装騎兵が強化された状態だったと見るいっぽうで、広開土王碑文の誇大な数字には疑問を挟まない。つまり万単位の重装騎兵が半島南部に向けて押し寄せたと見るのである。

朝鮮半島は、高山は少ないが、日本以上に山がちである。そのため、朝鮮戦争の際にも、戦車部隊が山地に阻まれて自由に機動（軍隊の作戦上の運動）できず、そのことが戦況に度々影響を与えた。騎兵、まして重装騎兵は戦車以上に山地を自由に踏破できない。高句麗を発した重装騎兵の大軍があったとすると、古代中国のような軍事道路は建設されていなかったから、数頭が横隊となって列をなして行軍するわけにはいかず、山間地の谷間の道（その多くは村々を繋ぐ踏み分け道程度）を長蛇の列（単純計算すると1万頭なら先頭から殿までなんと全長100ｋｍ程度）になって、南へ南へと延々数百キロの道のりを行軍しなければならない。何隊かに別れて分進したかもしれないが、それでも各隊10km単

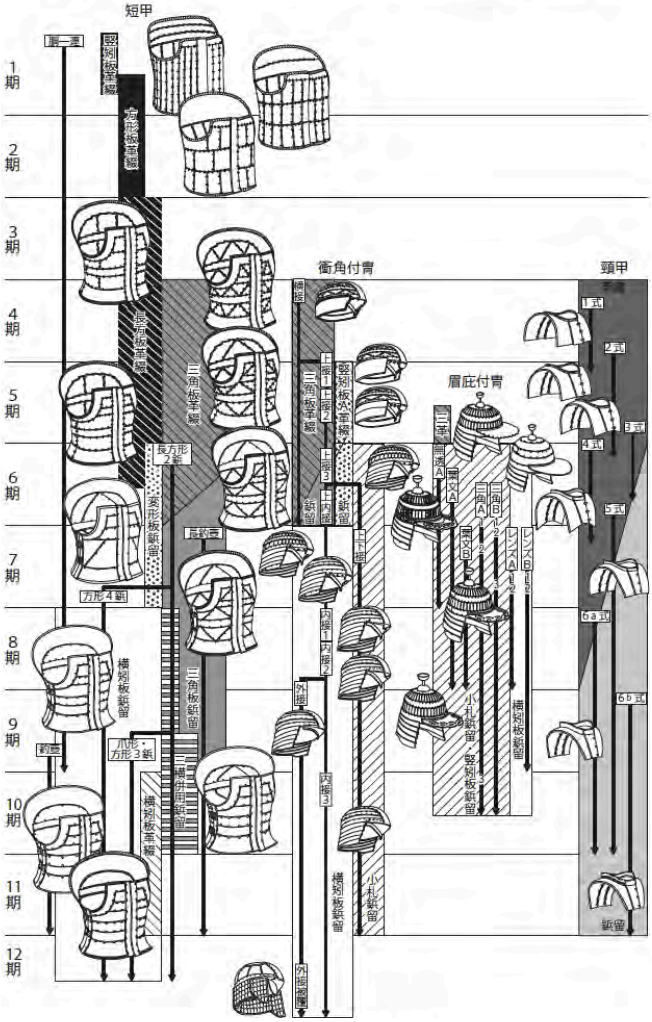


図７　古墳時代前期から中期にかけて、倭の甲冑も急速な発達を遂げていく（川畑 2015）。ただし、これらの武具は指揮官クラスのためのものであり、兵士（大半は弓兵）は軽装甲、あるいは全く装甲していなかった可能性が高い。軽装であることが倭弓兵の機動を保証していた。

位の長さになる。これは伏撃する側にとっては、またとない攻撃対象である。渓谷の狭隘（きょうあい）部、渡河地点、低湿地など、朝鮮半島の複雑な山間地には、待ち伏せに適した地点は無数にある。機動力のある軽装弓兵が戦術要地に展開してヒット・アンド・アウェイのゲリラ戦を仕掛ければ、高句麗側は間違いなく苦戦を強いられ、そう簡単には南に向けて進軍できなくなったはずである。

もちろん高句麗軍がそうした愚かな戦法を取ったとは思えない。高句麗軍の立場から軍事的合理性をもって南侵作戦を立案するとすれば、例えば次のようなものになるだろう。

第一陣として、機動力に富んだ軽騎兵とそれを支援する軽歩兵とが、新羅に向かう複数の経路に分かれて迅速に南進し、予め選定した、あるいは必要な戦術要地を次々に制圧して行く。各侵入経路ごとに投入される軽騎兵の各部隊は、おそらく総勢200騎前後、３騎兵中隊からなる１騎兵大隊相当の規模ではなかっただろうか。そのうち１騎兵中隊70騎ほどが威力偵察の任務を兼ねた前衛部隊を、残り２中隊がそれぞれ中衛と後衛を務める。

前衛中隊のうち、20～30騎からなる騎兵小隊が偵察小隊として本体から数キロ先行し、敵情を偵察する。騎兵小隊のうち、数騎からなる騎兵分隊は、前哨（ぜんしょう）（敵情を偵察し敵襲を警戒するために前方に配置する部隊）としてさらに先を進み、接敵、あるいはその可能性を認めた場合は、敵戦力の規模や兵種などを後方に伝達する。この情報をもとに、後続部隊は投入戦力の規模を決定し、倭兵を排除する。予期せぬ侵入に備えて、倭軍が大隊規模の騎兵を阻止できるだけの兵力を各方面に常置できていたとは思えないので、全戦術要地の制圧には、仮に5ルートから侵入したとしても、兵站部隊や予備部隊を除けば、５騎兵大隊（１騎兵連隊）1000騎程度の戦力で十分ではなかったかと思われる。もちろん、侵入経路のうちには倭の大部隊が駐屯している場合も考えられるが、その時には、歩兵その他の後続戦力の到着を待つ必要があったのは当然である。

尖兵（せんぺい）（前進部隊の前方で敵状を探り敵の攻撃を警戒する小部隊）として要地を制圧しながら前進する騎兵に続いて、歩兵部隊は制圧済の要地に次々に布陣して迅速に防備を固めて拠点化し、輜重（しちょう）（軍隊が前線に輸送する食糧、被服、武器、弾薬などの軍需品の総称）部隊の中継点として安全に機能させる任務があった。倭軍の反撃にも備えるなければならず、各拠点には、兵站（へいたん）（部隊の戦闘力を維持増進して作戦する機能、すなわち補給、整備、回収、交通、衛生、建設、役務、労務などの総称）要員も含めて少なくとも100～200名（１歩兵中隊）程度の戦力を配置する必要があったと考えられる。また、本営や他隊との通信、周辺の索敵や警戒のために、各拠点には１小隊20～30騎程度の軽騎兵も配置されたに違いない。各進撃ルートの戦術要地にそれぞれ10箇所程度の拠点が構築されたとすると、全体で50箇所、1000～2000名（１個大隊）程度の歩兵、1000～1500騎（１騎兵連隊）程度の騎兵が配されたと想定される。したがって、戦闘開始時の高句麗軍の投入戦力は、２騎兵連隊規模（2000～3000）の騎兵、１個大隊規模（1000～2000）の歩兵、あわせて歩騎3000～5000程度という計算となる。万一に備えての予備兵力として。騎兵を1連隊規模増員したとしても、5000～7000程度の兵力の投入によって、高句麗本国から新羅ないし加耶に至る作戦

線（作戦目標を達成するために根拠地から目的地へと部隊が通過するための経路）を奪取し、後方連絡線（兵站線：根拠地から野戦軍に軍需品を補給し、人馬や捕虜を送還するために用いる交通網）として確保できると推定できる。

なお、騎兵を支える馬匹（ぼひつ）は、行軍中も定期的に休ませ、水と食料を与えなければならない。1000単位の数の馬の水場を確保するだけでも大変な作業になる。さらに軍馬は1日10kg弱の糧秣（りょうまつ）を必要とする。千頭なら1日10トン、高句麗軍本営から戦地まで仮に片道１ヶ月の行軍をすると、往復するだけで600トンの馬糧を携行しなければならない。別に兵士の食糧も必要である。大量の予備の矢をはじめとする軍事物資の輸送も欠かせない。輸送にあたる人馬も食糧を消費する。千単位の騎兵集団には、大きな兵站（へいたん）能力が求められる。その点だけを考えても、広開土王碑文の万単位という歩騎の数には、かなりの誇張があると考えられる。

予想される主力同士の会戦（慣例上、小部隊間の衝突を戦闘、大兵団の戦いを会戦という）の戦力は、作戦線確保部隊とは別に準備しなければならない。ただし倭軍主力といっても所詮は船舶で運んでくる軍勢であり、その戦力はせいぜい1000人単位ではなかっただろうか。しかも倭軍には新羅を本格的に占領し、属国として支配する意思もその力もなく、『新羅本記』の記載などを見ても、侵入の主目的は略奪で、機をみて撤退するのが常であった。新羅側も、城に籠もって侵入に耐え、倭兵が引くと見るや追撃して逃げ遅れた倭兵を倒し、あるいは捕虜にするという戦法を取っていた。悪く言えば、馴れ合いのような戦闘を繰り返していたのである。広開土王碑文に、あたり一体に満ちみちていた倭軍が、高句麗軍が接近すると、一斉に退却した、とあるのも、そうした何時もの戦い方の延長に見える。高句麗軍も、そのあたりは十分に把握していたのではないだろうか。もしそうだとすると、作戦線奪取のために当初投入された1連隊1000～1500程度の規模の軽騎兵が姿を見せただけで、両軍の会戦などなしに、倭軍は新羅から姿を消した可能性が高い。逆に、倭軍は、高句麗軍が撤退するや、再び新羅に侵入して略奪を繰り返している。怒りに駆られた新羅王寶聖尼師今（シルソンニサコム）が、対馬攻略を思ったとされるのは実にこの時である。

新羅から倭軍を追い払った高句麗軍が、そのまま踵（きびす）を返して帰還してくれれば問題はなかった。ところが高句麗軍は、慶州を通り越して、そのまま真っ直ぐ谷間（たにあい）の道を突き進み、その勢いで金海加耶を襲って陥落させてしまった。

高句麗軍は当初からこの作戦を計画していたに違いない。新羅までの後方連絡線確保は戦いのほんの第一段階に過ぎず、倭軍が撤退するのも計算済み、会戦準備は、まさに金海加耶の包囲攻撃のためになされていたのだ。攻城部隊として重装鉾歩兵や弓兵を中核とする数千規模の歩兵、前線の両翼を固めるための相当数の騎兵、さらに１～２大隊規模200～400騎程度の重装騎兵もいざこの時の衝撃部隊として用意されていただろう（それ以上の数の重装騎兵は金海加耶周辺の狭小な地形・地勢では取り回しが難しく無用の長物となったと思われる）。

高句麗軍による金海加耶包囲戦（siege）に、援軍としてどの程度の規模の倭軍が加わっていたかは分からない。ただ、倭軍は軽装で、携行用の手盾も衝撃兵器としての長槍（パイク）も装備していなかった。主要兵器は弓である。左手に盾、右手に長い鉾を装備して防戦する金海加耶兵を、矢を放って支援することはできただろうが、そもそも戦力に差がありすぎたのではないかと思われる。船舶による脱出の手助け程度しかできなかったのではないだろうか。いずれにしても、金海加耶と倭の側に、取り返しのつかない油断があったことは確かである。

倭軍の戦闘教義（ドクトリン）

百済と倭は、加耶の経営や帰属をめぐっては時に敵対し、また宋をはじめ中国王朝との外交をめぐっては時に競合し、さらに新羅との同盟を模索する百済に対して、新羅とは一貫して敵対した倭ではあったが、対高句麗をめぐっては概ね利害と方針が一致し、高句麗による侵攻に抗する百済を倭が渡海して支援するという戦いが長く断続的に続いた。新羅との抗争を含めた半島での戦いを通して、倭軍は武器・武具などの装備を改良し刷新したことが考古的に明らかだが、ハードウェアだけではなく、倭軍固有の戦闘教義（ドクトリン）（その軍隊の戦い方を規定する基本的な考え方）がそのなかで育っていった。

高句麗軍でも、百済軍でも新羅軍でも、世界の大半の軍隊にとって、戦闘においてもっとも重要な部隊、その主軸となるのは、一般に敵正面を撃破することを目的とした衝撃部隊である。長い柄の刺突武器（鉾（ほこ）、槍（やり）、パイクなど）を主兵器とし、厳重に

装甲した歩兵による密集陣形集団（例えば古代ギリシャのファランクス）がその代表的な兵種である。高句麗軍であれば、重装密集歩兵の他に、長鉾を装備した重装騎兵も、強力な衝撃部隊として運用することができた。まずこれで、敵の戦列に大穴を開けるのである。

ところが、倭軍は一般的な意味での衝撃部隊を持たない。主軸となる部隊は軽装の弓兵であった。個々の兵士は手盾を持たない（置き盾はあるが、それは仮設陣地構築用の部隊装備である）。徹底的に弓を射ることにだけ特化していた。もちろん弓は倭弓である。対高句麗戦の初期には短刀や短剣、その後は大刀で武装していたが、そうした白兵戦用の武器は、最後の手段である。数名に１本程度、槍も共同装備していたが、2m程度の短槍で、仮設陣地防衛用の予備兵器だった。こうした極端に弓兵中心の部隊編成が、国造軍を経て律令軍にまで引き継がれていく。701年に制定された大宝「軍防令」から単純計算すると、律令期日本の総兵力は20万人という計算になるが（下向井　1999）、少なくとも法制上は、その全てが弓兵（そのうちの一部は弓騎兵）という世界の軍事史上他に例を見ない、実に奇異な軍隊だったのである。

倭軍の戦闘教義は、以上に示したその極端に軽装弓兵に偏った装備と、半島での戦いにおける倭軍の役割から導き出すことができる。既に述べたように、倭軍の最大の強みは水軍にあった。浿河の戦いで高句麗軍の敗走に一役買った可能性が高いことについては先に記した。倭軍の戦い方の基本は、当初から強力な水上戦力の運用にあったと見るべきであろう。これに対して、陸上戦力としては重装鉾歩兵のような衝撃部隊を基幹兵力として持たず、間接攻撃部隊の軽装弓兵をその主軸として運用するという、倭軍独特の戦闘教義は、海を隔てて百済（または伽耶）を支援しなければならないという、倭軍の地理的な制約に導かれて成立したと考えられる。

海上輸送できる陸上戦力の数は限られている。だとすれば、最も効果的な兵種を優先して送り込むのが軍事的には理に適った選択である。そのため、多人数が必要な主力衝撃部隊については地元の百済や加耶に任せ、高句麗重騎兵の突撃を阻止するのに有効と分かった弓兵部隊で支援する、そうした相互連携のパターンが経験的に採用されていったものと推定できる。それというのも、文末資料に紹介したように、重装騎兵は長槍（パイク）部隊と弓兵部隊の連携攻撃には想像以上に脆いからである。ただしその場合に常に問題になるのが、幼少期からの長い訓練が必要な弓兵の頭数を揃えるのは、そう簡単ではないという点である。しかし、倭にはとくに東国（現在の中部地方から関東地方にかけての地域）という、優れた弓兵の一大供給源があった（これに対して西国は優秀な水主：船乗りの供給源だった）。海路遠征して百済・加耶を助け、優勢な高句麗騎兵との苦闘を通して、文化進化論[3]でいうところの適応的プロセスを介して、軽装弓兵を軍の主軸に据える固有の戦闘教義が固まっていった、そう考えられるのである。

おそらく戦いの当初は弓兵だけではなく雑多な兵種が投入されたものと思われる。弓も、はじめの段階では定型化された倭弓だけではなく、弥生時代（あるいはさらに縄文時代以来の）の伝統を引く長短さまざまな種類の弓を持つ兵士が動員されていたのにちがいない。遺跡からも雑多な弓が出土するからである。しかし、実戦を通して兵種は弓兵へと収斂し、弓も倭弓に統一され、同時にその生産体制も整備されていったのであろう。

漢城陥落（475年）

475年、高句麗の長寿王は、百済に間諜を送り込み、蓋鹵王を騙し無駄な土木工事などで国内を疲弊させると、お決まりの内紛が生じたのを期に、3万の軍勢を率いて王都漢城を包囲した。蓋鹵王は為すすべもなく、城から西に向けて脱出を図ったが、高句麗軍の追撃を受けて捕縛され処刑された。王子の文周が逃れて文周王として即位し、熊津（ウンジン、百済語でコマナル/現在の忠清南道公州市）に遷都したが、この敗戦により百済は一旦滅亡した。

高句麗の攻撃で陥落した百済の第一期王都漢城は、現在のソウル市の東南東８kmほどに位置し、漢江が南に大きく蛇行した部分にできた中洲を利用して築かれた城である（図３）。中洲の南北を流れる漢江が天然の堀の役割を果たしている。とはいえ堅固な守りの城とは言い難い。例えば、攻囲する敵

[3] 生物の進化を参考に、石器や言語、社会構造といった人間の文化が時間とともにどのように変化するかを、数理モデルや統計手法など科学的アプローチを用いて研究する分野

図８ 百済の第一期首都漢城周辺（五万分の1 「纛嶋」「廣州」昭和１年 朝鮮総督）

に漢江右岸側の高地（標高43,8m）を取られると、標高が20m弱しかない城内を全て俯瞰（ふかん）されてしい、味方の動きを敵に全て把握されてしまう。また、中洲に築かれたことにより、地勢的に孤立を招きやすい。南北を流れる漢江は、いざという時に逃げ道を塞ぐ障碍（しょうがい）ともなりうる。実際、蓋鹵王は孤立して南方に逃れられず、西側に脱出しようとして、呆気（あっけ）なく捕らえられ王妃もろとも殺されてしまった。

百済の築城の基本思想は、基本的に甘いというしかない。天敵の高句麗は北から攻めてくると分かっているのだから、城外の北側に、城内を見渡せる戦術要地があるという事実一つだけとっても、築城論として論外である。百済における軍事思想の甘さの首尾一貫性、その典型的な一例を確認することができる。この地に王城を築いた第一の理由は、漢江を利用しやすい、交易に交通にはなはだ便利であるということに尽きるのだろうが、敵も同様に漢江を利用しやすいのである。

百済はソウル市の北に北漢城と呼ばれる堅固な山城を築いていたが、漢城（北漢城に対して南漢城とも呼ばれる）包囲戦の一環として攻撃を受け、7日間で陥落している。本営の漢城と離れ過ぎており、連携することで防衛力をより強化できる位置にはないように思える。百済の防衛戦略の支離滅裂さの象徴ともいえるかもしれない。

さて、漢城陥落に際して、倭軍は百済軍に対してどの程度の支援が可能だっただろうか。そもそも百済軍自体が内紛の果に敵軍に侵入されて混乱の極みにあり、手の施しようがなかった、というのが実情だろう。ただし、倭の水軍部隊が派遣されていれば、包囲される前に漢江を利用して文周王子とその家族や側近の脱出に一役買えたかもしれない。当然危機的な状況下であるから、相当数の弓兵も随伴し

ていたに違いない。ただ、もし状況が分からないままに漢城包囲戦に巻き込まれ取り残された倭兵がいたとすれば、百済特有の軍事判断の甘さの犠牲になったということになるだろう。

白村江の戦いと倭の海洋戦略

優れた水上戦力と優れた弓兵の組み合わせという点で、倭兵は古代ギリシャ世界で有力な傭兵強力として活躍したクレタ兵と性格がよく似ていることは間違いない（文末資料参照）。いっぽうで倭兵を傭兵とみなす見解がある（松木2001、金2019）。はたして、そうだろうか。もし倭兵が利益を最終目的に動く傭兵だったとすれば、百済滅亡の際、倭軍はどうして百済と心中するような戦い方をしてしまったのだろうか。倭兵とクレタ兵とは、軍事的な性格は確かに良く似ている。しかし、その社会的な性格は、全く異なっていた。白村江の戦いにおける倭軍の振る舞いをみればそれが分かる。

斉明6（660）年、唐の陸海軍13万は海路、新羅軍5万は陸路、百済に攻め込んだ。何時もの通り内輪もめ状態にあった百済は滅亡した。駐留軍を残し、唐・新羅主力が高句麗に戦いを移すと、百済遺民が一斉に蜂起して復興運動を開始し、援軍の派遣と質として倭に居た王子豊璋の帰還を倭に要請した。倭は661年に護衛5000とともに豊璋を返し、663年3月には新羅攻撃軍として兵23000を派遣、8月には百済遺民の拠点の救援に万余の軍を派遣した。同月、白村江（現在の錦江河口付近）で、倭の水軍は唐海軍に真正面から海戦を挑み、短時間で一方的に敗北した。

敗北の理由はさまざまに議論されているが、ここでは海戦に絞って考察する。結論を言えば、水上戦力のレベルに隔絶的な差、例えば一方は船、一方は舟という違いがあった。唐海軍の船からは倭軍の舟を見下ろし、逆に倭舟からは見上げる形になった。それだけでも攻撃の利は圧倒的に唐海軍にあった。にもかかわらず、倭の水軍は、まともに陣形も組まずに、唐海軍の大型軍艦の戦列に真正面から突入した。受けて立つ唐海軍の将兵は、そのあまりの無謀さ、大いなる無能さに驚いたのではないだろうか。世界の海戦史上、稀に見る完璧さで倭の水軍は壊滅した。この敗北により、倭（日本）は周辺海域での制海権を喪失した。のみならず、本来の海洋国家と

図９「白村江の戦い」戦域図（Wikipediaより）

しての性格を長く忘れる結果となった。その影響は今日まで続いているかもしれない。

ここでは、なぜそのような余りにも稚拙な戦い方をするに至ったか、という分析は行わない。その代わり、海洋戦略の観点から、倭の水軍が圧倒的に強力な唐海軍を相手にどのように戦うべきであったかを考察する。

「制海を獲得することができないということは制海を失ってしまったということだ、と捉えるのは間違っている」と有名な海洋戦略家のコーベット卿が言っている(コーベット　2016）。どういう意味だろうか。コーベット卿は続けてその理由を述べる。「攻勢作戦によって制海を獲得するには弱すぎる国は、それでも全般的な防勢の姿勢を取ることによって制海を争奪状態に保つことには成功するかもしれない」というのである。その例として、フランス海軍が七年戦争（1756年に発生し欧州諸国を巻き込んだ多国間戦争）で優勢なイギリス艦隊と対峙（たいじ）した時、決戦を導く攻勢作戦を回避し、「積極的」防勢に務めることで、結果的にイギリスのカナダ征服を阻止した作戦を挙げている。

コーベット卿は続ける。「海洋国家にとって、状況が自分達に有利な戦いに展開するまで艦隊を現存させておくよう戦略的ないし戦術的活動によって決

戦を避けること、そして艦隊を活発に現存させておくこと、すなわちフリート・イン・ビーイングという状態が極めて需要なのである」と。

この考えに立てば、倭の水軍は、唐海軍に決戦を挑んではならなかった。そもそも唐海軍は、倭の水軍との決戦（とそれによる殲滅）を熱望し、倭の水軍主力の行方を必死で追っていたはずである。ところが倭は、自ら強敵の前に姿を現し、全水軍主力を差し出してしまった。

最後に、思考実験として、倭の水軍主力の半分が、海戦を前に散り散りになって逃亡し、大海原の四方八方に行方をくらましてしまったとしたら、その後どうなったかを考えてみよう。

唐海軍は困ったはずである。広い海域に散り散りになった水軍の行方を探すのは容易ではない。艦隊を分散させて索敵すれば、潜伏していた倭の船団に襲われ、各個撃破される可能性もある。さらにいつまでも問題の海域に留まれるわけではない。

いっぽう、倭の水軍には、例えば新羅の東海岸を徹底的に荒らし回るという「卑怯な」手もある。コーベット卿のいう活発な「現存艦隊」が生き残っていれば、あるいは百済の復興もあり得たかもしれない。そうすれば幻の「百済王族語」や、濊（わい）語を今日でも朝鮮半島で耳にすることができたかもしれない。高句麗の滅亡も先に伸び、東アジア情勢は全く変わったものとなっていたかもしれない。

歴史にはイフがあるから面白い？！

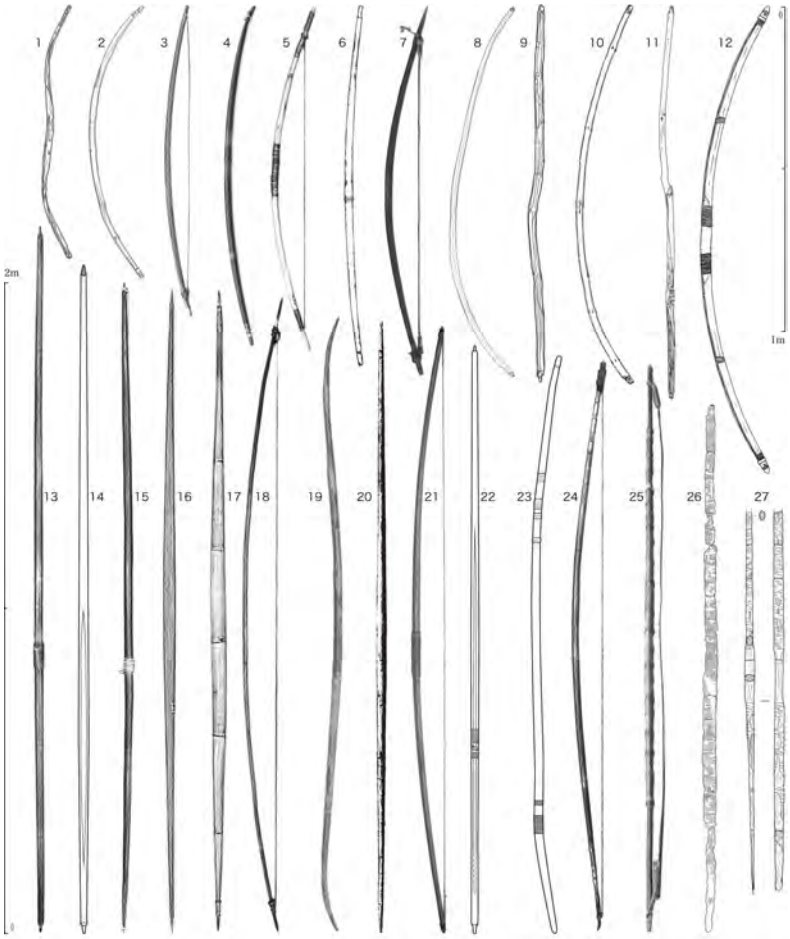
補足資料

倭弓の起源

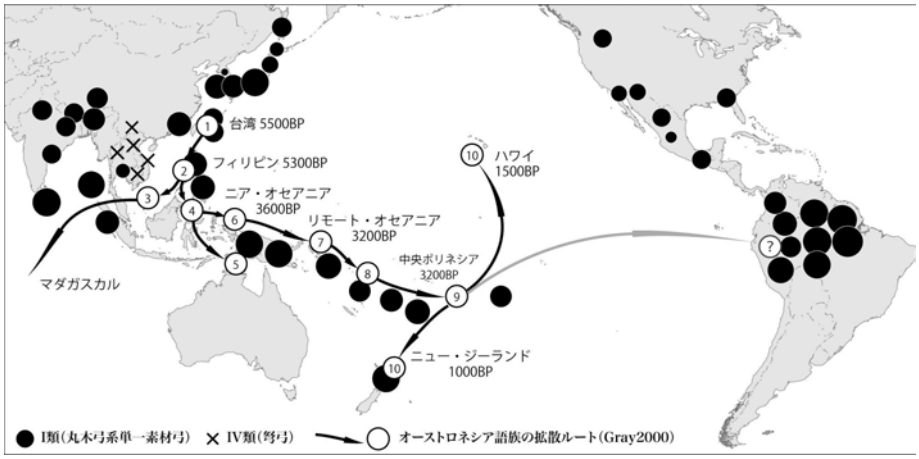
世界各地で使われてきた様々な弓は、いくつかの類型に分類できるが、それら諸類型の分布状態は、まずは材料などをめぐってその土地の自然環境に規定され、次いで歴史的・文化的に二次的な変異を受けてきた。

古代日本の弓、倭弓が属する太平洋型長大弓、すなわち人の背丈を越す丸木の長弓は、もともと太平洋やインド洋の沿岸・島嶼部の、湿潤で温暖な海洋性気候に支配された土地に特徴的に分布する弓である。とりわけ、太平洋島嶼部へのIIｂ長大な弓の分布は、オーストロネシア語族の拡散域とほぼ完全に重なることから、その分布には彼らが強く関与していたことが明らかである。

オーストロネシア語族とは、5500年ほど前に台湾を起点として、西はマダガスカル、東はイースター島、北はハワイ諸島、南はニュージーランドまで、広大な海域に拡散した海洋民である。その源郷とされる中国南部の跨湖橋新石器時代遺跡からは、初期のイネやブタ、丸木舟とともに、世界最古の漆塗りの丸木弓が出土しており、倭弓も含めた太平洋型長大弓の共通の祖形ではないかと考えられる。中国南部から極東への伝播経路は未解明だが、朝鮮半島では紀元前1世紀に、跨湖橋遺跡の弓に類似した漆塗り長大弓が出現する。日本列島でも、遅くとも弥生時代中期頃から、同系統の倭弓が出現するが、広く普及したことが確認できるのは、古墳時代中期、５世紀の中頃である。



さまざまな丸木弓　下段右端が跨湖橋遺跡出土弓（岡安 2015）



オーストロネシア語族の拡散と太平洋型長大弓の分布（岡安 2015）

倭人と倭語（祖日本語）の起源

2021年、英国の論文誌『Nature』にベルギーの言語学者ロベーツ等が日本語の起源に関する共著論文を発表した（Robbeets他　2021）。ロベーツの持論は、日本語は朝鮮語やトルコ語と起源を共有するトランスユーラシア語（アルタイ語）だというものだが、論文では言語学・遺伝子学・考古学三分野のデータが全て自説を裏付け、いわば三角測量に成功したと自賛している。具体的には、祖日本語と祖朝鮮語の話者は、西遼河（中国の内モンゴル自治区から遼寧省へ流れる河川）周辺に起源を共有するが、まず祖日本語話者が無文土器文化とともに朝鮮半島へ拡散し、さらに日本列島へと移住して弥生文化の担い手となった。遅れて祖朝鮮語話者が半島へと拡散し、祖日本語話者を吸収して言語を置き換えた、それが三分野の研究から証明されたとする（執筆者には複数の日本人研究者も含まれている）。

九州大学の宮本一夫も、考古学の立場から、ロベーツ等の見解をほぼ踏襲する論文を発表している（宮本　2021）。さらに今年に入ると、国立科学博物館が開催した特別展「古代DNA−日本人のきた道−」図録で、同博物館の篠田謙一が弥生時代の日本列島に現れたゲノム集団を探すと、5000年程前の西遼河流域の雑穀農耕民にたどり着いたと述べている（国立科学博物館　2025）。さらに国立歴史民俗博物館の藤尾慎一郎は同書で、約2900年前に半島南部の青銅器文化人が水田稲作を主な生業とする新たな社会や文化を北九州に持ち込んだ結果、弥生時代が始まったとしている（国立科学博物館 2025）。

弥生人の起源に関する近年のこうした研究成果は、1991年に発表された埴原和郎の『日本人起源に関する二重構造モデル』の先見性を、改めて確認させるものである（埴原 1991）。

しかしロベーツが自賛する「三角測量」には弱みがある。ロベーツの仮説を、別の言語学上の仮説に取り替えても、論文で示された遺伝子学と考古学をめぐるモデルはさしたる問題もなく成立してしまうからだ。それどころか、別の言語学的モデルをあてはめた方が、ロベーツ説よりも様々な事象をより合理的に説明できてしまう。伊藤英人による濊倭同系モデルである（伊藤 2021）。

757年、統一新羅の王権は朝鮮半島各地の地名の漢字表記を中国式に改めた。8世紀の日本で「无射志」を「武蔵」と改正したのと同様である。その際に旧名と新名とを併記した資料群が新羅の『三国史記』（高麗時代の1145年に撰進）に残されている。なかでも「高句麗地名」と呼ばれる地名群に「三 mi」「五 itu」「七 nana」「兎 usagi」など、８世紀の日本語と酷似する語が含まれることは古くから知られてきた。日琉諸語（本土日本語と琉球諸語の総称で共通の日琉祖語（proto-Japonic）から分岐したとされる）以外に、唯一その同系言語と認められるのがこの言語要素である。伊藤は朝鮮半島から吉林省、遼寧省にかけての地名に現れるこの言語を「大陸倭語」と定義し、その分布が古代韓語とモザイク状に混在することなどから、８世紀中頃までその話者が半島全域に広く居住していた可能性が高いことを明らかにした。そして河野六郎の先行研究も踏まえ（河野　1993）、「大陸倭語」の話者を、もともと中国沿岸に居住し、水田耕作と水田漁業、畑作を行いつつ、水産物や皮革製品加工および物流に大きく関わった「水の民」（海民・内陸水系民）で、全羅南道の馬韓残余勢力と倭との交通にも関わった濊人と特定した（伊藤 2021）。

ロベーツの「三角測量」論文の枠組みを継承しつつ、しかしロベーツのトランスユーラシア語モデルの部分だけ伊藤の濊倭同系モデルとそっくり入れ替えてしまっても、遺伝子学と考古学のモデルには、多少の修正あるいは異なる解釈が必要になる程度で、大きな矛盾は生じない。しかも極東周辺の人とモノと情報の動きは、むしろその方がはるかに整合的に説明しやすい。例えば弓の問題が典型的である。先述したように倭人の木質の長弓は、明らかに南方系の弓である。トランスユーラシア語族の間で一般的な動物質の彎曲複合弓とは相容れない。水田農耕にしてもそうだ。西遼河流域の雑穀農耕民が半島を経て列島にやって来る途中で、水田農耕技術と文化を吸収したという説も成り立ちうるのは確かだが、水田農耕民が雑穀農耕も取り入れたと考えることもできるし、遺伝子については、まだ分かっていることの方が少ない。西遼河流域の住民がやってきたのは確かだろうが、半島や列島への移住者はそれだけではないはずで、まだよく分かっていないだけだ。古代日本の神話群、とくにアマテラス系神話をはじめとする古層のそれには、南方系の要素が強く認められることは古代史学の常識といってもよいだろう（例えば、溝口 2019）。

Mercenary　Archer
傭兵と弓兵の軍事史

1．古代エジプトのヌビア弓兵

エジプト人は盾と剣で武装したエジプト人歩兵部隊を主力として戦ったが、傭兵のヌビア人弓兵隊を統合運用し、双方の強みを活かす戦法を取った。歩兵部隊が敵に突撃する時には、ヌビア弓兵が間接射撃で後方からこれを支援し、逆に防御力の弱い弓兵が敵に直接攻撃を受けた場合には歩兵が間に割り入って歩兵を助けた。

ヌビアはナイル川上流の荒れた乾燥地帯で農業生産力は低いが、弓射に優れた狩猟民が住み、エジプト人は「Ta-Sety」（弓の土地）と呼んで恐れていた。しかし征服して領土に組み入れると住民を弓兵として雇い入れ、重要な戦力として軍事組織の編成に組み入れたのである。

最近の発掘によれば、紀元前2300年頃の数十の墓が発見され、男性墓には1歳半の子供でさえ弓が供えられていたという。

2．古代ギリシャのクレタ人弓兵

古代ギリシャでは、ポリス市民は重装密集歩兵陣（ファランクス）を組んで戦うのが普通だった。ところが、クレタ人はファランクスを組まず、弓兵を主力とし、待ち伏せや夜討ちを得意とした。そのためギリシャ本土人からは、卑怯者と蔑視されたが、一方でその弓射能力が重用される存在だった。

クレタ島は大半が荒地で住民は狩猟や漁労に従事した。狩猟は山に分け入り野生のヤギを弓で倒すというもので、弓射や待ち伏せ攻撃技能の理想的な習得の場となった。クレタ人海賊はクレタ人お雇い弓兵と同じ社会的背景を持ち、エーゲ海全域の集落を襲って略奪

半膝をついて弓を構える古代ギリシャの弓手。ホプライト（重装歩兵）が盾で守っている。紀元前550-500年

ヌビア弓兵　"bowmen"と呼ばれ歩兵に支援された。

や誘拐を欲しいままにしていた。スパルタ人が初めてクレタ弓兵を雇い入れて運用し、ギリシアに傭兵文化を生み出すとともに、クレタ弓兵という戦闘集団を誕生させた。弓兵は重装歩兵（ファランクス）の後ろに配置された。

アレキサンダー大王もクレタ弓兵を活用した。戦術単位は500人の「ロチョイ」と呼ばれる軽装弓兵で、親衛騎兵の機動作戦に徒歩で随伴し、その確かな弓射能力と迅速な移動能力で戦いに貢献した。クレタ弓兵の任務上の特性は、迅速に移動して困難な地形を克服する機動性、速く正確に射る能力にあり、その能力は軽装であることに保証されていた。

倭軍の主力たる弓兵も、指揮官クラスを除けば、基本的に軽装であった。軽装であることが、クレタ弓兵と同じように、その能力、とりわけ機動性の高さを保証していたと考えられる。

3．イングランド長弓兵と倭弓兵

フランスは、14世紀初頭の戦場で世界で最も優秀と広く見なされる重装騎兵を擁し、圧倒的な強さを誇った。そのため、フランスの敵国は、自国の軍隊の編成を工夫することで、自軍の質と量の劣勢を相殺(オフセット/offset)する方法を模索した。その一つが長弓兵の重視である。イングランド人はウェールズ人から歩兵主体の小兵力軍にとって、長弓兵部隊が強力な騎兵と対等に戦える戦力であることを学んでいた。

1346年のクレシーの戦いでは、イングランド軍は戦場中央に下馬して槍を構えた重装騎兵を並べ、その両脇に長弓兵（ロングボウメン）を配した。まずイングランド長弓兵とフランス軍傭兵のジェノヴァ弩弓兵（クロスボウメン）が矢を放ちあったが、射程距離と発射速度でイングランド長弓兵が凌駕（りょうが）し、弩弓兵を潰走（かいそう）させた。次いで長弓兵はフランス重騎兵に矢を放ち始め、その突撃を余儀なくさせた。結局、フランス重騎兵は矢の雨の中で散々に射倒されところ

を、ナイフを手にしたイングランド軍下馬兵に掃討されてしまった。

英仏百年戦争の一連の戦いでイングランドが決定的勝利を収めたのは、統合防御（2つ以上の異なる軍種を有機的に結合した防御）の原則による。統合防護を達成したことで他の欠陥がオフセットされた。統合はイングランド軍にとって最も重要な原則であった。

百済と倭軍にとっても、両者の強みと弱みを補完し合う統合防御が重要だった。高句麗軍重装歩兵の優勢を効果的にオフセットする上で、百済軍主力と倭軍の水上戦力と弓兵による支援射撃の統合が重要な役割を果たしたことが、倭軍装備を弓兵偏重の軍事編成に固定させていった可能性が高い。

長弓（ロングボウ）は、ウェールズとイングランド北部における辺境農民の生活の特性から、特異な形で発達した文化的兵器だった。それを使えるか否かは、幼少時から徹底的に訓練を積むことに全面的に依存していた。そのため、他の社会は同じものを再現することはできなかった。ウェールズとイングランド北部でも、16世紀に文化的な枠組みが変容すると、高度な技能を有する弓兵を育成できなくなった。

高句麗軍との交戦時代の倭も、大半の成年男子が弓を引けるという、世界の軍事史上、極めて特殊な社会であった。

主な参考文献

- 五十嵐基善 2014「新羅征討計画における軍事力動員の特質 」『駿台史學』152
- 伊藤英人 2021 「濊倭同系論」『 KOTONOHA』第 224 号 古代文字資料館
- 岡安光彦　2013「古代長弓の系譜」『日本考古学』第35号　日本考古学協会
- 岡安光彦　2015「原始和弓の起源」『日本考古学』第39号　日本考古学協会
- 川畑純　2015『武具が語る古代史–古墳時代社会の構造転換』京都大学術出版会
- 岸俊男　1966『日本古代政治史研究』塙書房
- 教育総監部 1941『演習用数量表』成武堂
- 金泰植　2019「４世紀の韓日関係史　－広開土王陵碑文の倭軍問題を中心に－ 」『日韓歴史共同研究報告書. 第1分科篇』
- 金富軾訳 1980『完訳三国史記』上・下　六興出版
- 久住 猛雄 2007「博多湾貿易」の成立と解体--古墳時代初頭前後の対外交易機構」『考古学研究会第52回総会研究報告』考古学研究会
- 国立科学博物館・他　2025『特別展　古代DNA　–日本人のきた道–』
- 坂本太郎他校注 1967『日本書紀』上・下　岩波書店
- 下向井龍彦　1991「日本律令軍制の形成過程」『史学雑誌』100巻６号 史学会
- 下向井龍彦 2018「律令軍制と兵士の装備」古代武器研究会『古代武器研究』vol14
- ジュリアン・スタンフォード・コーベット（矢吹啓訳）2016『海洋戦略の諸原則』原書房
- 浙江省文物考古研究所　2004『跨湖橋』
- 高倉洋彰　2013　「資料の不在と考古学」西南学院大学国際文化論集第28巻第１号
- 武田幸男 2007『広開土王碑との対話』白帝社
- 長田俊樹『日本語「起源論」の歴史と展望―日本語の起源はどのように論じられてきたか』三省堂
- 埴原 和郎 1994「二重構造モデル: 日本人集団の形成に関わる一仮説」Anthropological Science/102 巻5 号
- 松木武彦 2001『人はなぜ戦うのか』講談社選書メチエ
- 松木武彦 2007『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会
- 溝口睦子 2019『アマテラスの誕生―古代王権の源流を探る』
- Kazuo Miyamoto "The emergence of ‘Transeurasian’ language families in Northeast Asia as viewed from archaeological evidence" Evolutionary Human Sciences (2022)
- Mahoney, Daniel. "Agincourt with Artillery." Marine Corps Gazette (2021).
- Robbeets, Martine, et al. "Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages." Nature 599.7886 (2021)
- Rogers, Clifford J. "The Military Revolutions of the Hundred Years War 1." The military revolution debate. Routledge, 2018.